

# 都市景観賞表彰作品

- ① ふれあい緑道
- ② ほあんプラザ 中部電気保安協会
- ③ 安藤邸
- ④ 柴山邸
- ⑤ P・PARK
- ⑥ コーポラティブハウス 木附の里
- ⑦ 「公園の噴水をデザインしよう」の授業実践

- ①～⑥ 都市景観賞
- ⑦ 都市景観活動賞





# ふれあい緑道

区域 庄内川から二子山公園、朝宮公園、  
落合公園を経て潮見坂平和公園へ至る  
所有者 春日井市



この緑道は昭和36年「グリーンベルト構想」として計画され、着々と整備されてきた。今回は生地川と八田川の流れに沿った部分が注目された。当初植えられた樹木が今では見事に枝を茂らせている。春の桜並木や冬の雪景色、あるいは緑道へ通じる橋など、緑道にかかわる幾つかの風景がかすがい百景にも選ばれており、緑道に対する人々の愛着の深さをうかがい知ることができる。このことが今回の都市景観賞受賞にも大きく影響したと思われる。

緑道は離れて眺めるよりも、散策やサイクリングを楽しみながらその風景の中に埋没するのがよい。木立の中を続く舗装は、大きな通りに行き当たっても地下道を抜け途切れることがないので快適で

あり、全線にわたって控えめに立っている背の低い照明灯は、夜の散歩に風情を添えてくれよう。石塚橋（東野町）付近は「万葉の小道」と名付けられ、ここには大伴家持ら万葉歌人の歌に見られる梅、橘などの木々が配置され、その木の名を詠み込んだ歌が一首ずつ添えられている。その少し下流側には、市民の傑作であるハニワまつりで焼かれた小さなハニワが点在し、これらが道行く人にはほほえみかける。このような仕掛けが散策やサイクリングを楽しませてくれるのである。

ちなみに、朝宮公園からは尾張広域緑道が小牧市境まで延びているので、これを合わせると一本の緑道として実に総延長約15kmに達する。

(塩見 弘幸)





2 都市景観賞

# ほあんプラザ 中部電気保安協会

所在地 春日井市高森台4-16-9  
 所有者 (財)中部電気保安協会ほあんプラザ  
 設計者 清水建設㈱名古屋支店一級建築士事務所  
 施工者 清水建設㈱名古屋支店  
 伊藤造園土木㈱



ほあんプラザは、学習体験や研修を通して電気に関する知識を学ぶために設けられた施設である。付近一帯はニュータウンのサービスインダストリー地区であり、その一角を占める3,079㎡の敷地に建築面積854㎡の施設がゆったりと建てられている。敷地はなだらかな北側斜面の北西角地にあり、建物構造は鉄筋コンクリート造一部鉄骨造である。北斜面という立地上の不利があまり感じられないのは、この施設を含めてこの地区一帯の建物がどれも余裕をもって計画的に配置されているせいだ。

かまぼこを思わせる丸みを帯びた平屋建ての外観からは、人を招き入れるやさしさが感じられる。エントランス部分のひさしもまたかまぼこ型をしており、建物全体のリズム感が伝わってくる。玄関アプローチとして、幅広い階段とともに車いす用のスロープが用意されているのは、公共的性格の強いこの施設ゆえの配慮であろう。濃い黒色の屋根部分と赤レンガ模様の壁が一体となって落ち着いた雰囲気を醸し出しており、建物を取り囲む芝生や樹木の緑とほどよく調和している。

特筆されるのは北側と西側の緩い法面であり、ここは芝生と樹木の植栽で全体が覆い尽くされている。北斜面のこの地区一帯では法面に植栽を施すのが一般的であるが、その維持・管理は難しいようで、雑草が生い茂っている例が少なくない。その点、この施設では植栽の手入れが行き届いており、ボリューム感のあるグリーンベルトが建物を支えるように敷地を取り巻いている。道路に面した入口付近の樹木には電飾が施されており、大きなボール状の照明とともに夜の坂道を照らしている。電気保安協会ならではの演出である。

(林 上)



主要用途	広報センター
規模	地上1階
構造	鉄筋コンクリート造 一部屋根鉄骨造
建築面積	854.44㎡
延床面積	783.15㎡
完成時期	1995.7



地元の住宅が立ち並ぶ地域内で建て替えられた当住宅は、随所に景観に対する工夫がなされています。敷地内に残っている井戸と釣瓶を生かしたアプローチは自然で、好感が持てます。特に敷地北側の道路境界の塀は、瓦葺きしっくい塗りで、住宅の白壁と調和し、道路をはさんだ隣家の塀も同様の仕上げなので、違和感がありません。この塀は高さも低めで、歩行者が歩みを止めて、今では珍しくなってしまった釣瓶に目を向けるのに、ちょうどいいかげんで、住宅を遮へいするのではなく、むしろ生かす働きをしています。また、東側隣地との境界の塀は板に濃色の塗装をかけて、目立たない工夫がされています。

一般的に、住宅は建て替えるとその部分だけが浮き上がって、付近の家並みとなじまない場合が多いのですが、安藤邸は建物の形状、色彩等が控えめで、近隣の住宅や敷地内に残された蔵や庭木と調和した印象を与えます。古いものを大事に扱い、繕い楽しむ姿勢は評価できると思います。

まちなみは、時を経て味わいを深めていくものですが、その一部である建築物や工作物も、しっかりしたものは時の流れとともに落ち着きを増していきます。この住宅の数年後を見てみたいと思います。

(吉田 しづ代)



主要用途 専用住宅  
規模 地上2階  
構造 木造  
建築面積 155.50㎡  
延床面積 203.54㎡  
完成時期 1997.7





柴山邸とあるが、対象は柴山邸の庭である。普通、日本で庭というと、塀や垣根で周りを取り囲み、その中で自然と楽しむ小空間というイメージがあるが、これは外（公共空間）に開かれた庭、いや庭というより小公園と呼んだ方がいいかもしれない。

最初、写真で見た感じでは、やや雑然としていて、都市景観賞にふさわしいとは、実のところ言いかねるところもあったが、モノそのものとはかく、活動として、市民が緑を育て、公共空間に積極的に参与しようという姿勢が感じられ、最終選考（現地調査の対象）に残った。

現地は市の「交通児童遊園」に面しており、指定保存樹のムクの大木をはじめ、あふれるばかりの緑が南斜面の地形を生かして植えられ、対する堅い感じのする交通児童遊園と好対照をなしている。

道路から小径に分け入り、手作りと思われる、小径木を使った階段を上って行くと、ちょっとした広さの中段があり、休憩したり語り合いのできるようなイスやテーブルが置かれている。聞くところによれば、ここはご近所の皆さんの憩いの場になっているとのこと。まさに公園の役割を果たしている。全体としてやや統一感に欠けるところはあるが、いかにも素人の手作りというおおらかさがあり、それが親しみやすさを生み出し魅力ともなっている。

最近、門口に花の鉢を飾ったりする光景をよく見かけるようになったが、緑の量といい街への働きかける姿勢といい、これははずば抜けて訴えかける力を持っており、都市景観賞にふさわしいと推挙された。

（曾田 忠宏）



表彰対象 外構  
敷地面積 約860m<sup>2</sup>





都市景観賞

# P・PARK

所在地 春日井市松河戸町安賀2380  
 所有者 株式会社山忠観光  
 設計者 株式会社加藤吉安アトリエ  
 施工者 日本鋼管工事株式会社名古屋支店



庄内川は松川橋の北、国道302号に沿ってこのP・PARKはある。東名阪自動車道の高架や、ランプウェイなどの交錯する新しい、どちらかといえば無機質で人工的な風景の中の、これまた無愛想な外観のこの建物は、意外なことにパチンコ屋さんなのであった。

広大な駐車場に車を置いて冷暖房完備の広々とした店内に入る。老若男女が楽しんでいるパチンコの機械は最新のデジタル式で、こちらはアツというまに投了。休憩するロビーはギャラリーよりしくモダンでカラフルな家具が配置され、壁にはしゃれた絵画や時代順にパチンコ台がさりげなく飾られている。建物も子細に見ると工業製品の部材を用いて、新しい工場といった趣

であるが、形態・素材・色彩などの巧みなデザインにより簡素なうちにも品がよい。パチンコ屋に品がよいなんてと、大方の人が苦笑交じりに、これまでの日本中の風景にはびこったその手の建物を思い浮かべることであろう。そして我々の無関心と冷笑こそが野放しの状況を助長してきたともいえよう。気がついてみると昨今のパチンコ屋は実は巨大なハイテク産業に育っていたというのに。

P・PARKにはパチンコ屋に対する従来の認識を吹き飛ばすインパクトと、そして施主と設計者の心意気を感じる。新しい酒には新しい器をとという言葉にふさわしく、進化する娯楽産業とその利用者の未来を予感させる作品である。

(品川 誠)

主用途	遊技場
規模	地上2階
構造	鉄骨造
建築面積	1,291.89㎡
延床面積	1,460.21㎡
完成時期	1997.6





都市景観賞

# コーポラティブス木附の里

所在地 春日井市木附町1300-165他  
 所有者 コーポラティブハウス木附の里住人一同  
 設計者 (有)アトリエプランニング  
 株式会社連空間都市設計事務所  
 施工者 原料建設㈱・株式会社水野工務店共同企業体



主用用途 長屋型住宅  
 規模 地上2階  
 構造 木造  
 建築面積 887.19㎡  
 延床面積 1,332.08㎡  
 完成時期 1995.5

なごやかな風景である。軽やかな緑の田畑を前景に、重みのある緑の山を背景にして、なごやかなつぶやきがこだまする。木附の里に北側からアプローチするとそう感じる。長く伸びた道のような空間を通して近づけば、そのつぶやきはもう一段高く、明るくなった話し声や笑い声になっていた。わずか10軒の家の集まりでありながら、それは奥行きのある街のようであった。

木附の里はコーポラティブ住宅として建てられた。それは簡単にいうと、あらかじめ住み手が集まって自分たちの意見を入れたオーダーメイドの集合住宅をつくることである。1軒の家がオーダーメイドになることは別段珍しくない。しかし集合住宅となると、あらゆるものが共同作業となる。この木附の里が誕生するまでには、住み手を集めることに始まり、その意見調整、設計の工夫、役所との調整など、並大抵でないエネルギーが注がれた。こうしたプロセスが一般の開発住宅地からは聞こえにくい響きを生み出すこととなった。

素材や形に別段大きな嗜好が凝らされているわけではない。むしろそれらは質素といえよう。しかし中庭にあふれる緑とやわらかな土と水、表情豊かな玄関や窓、そして見え隠れする人影がここに香りを与えている。景観とは目に映るものだけではないということを改めて思う。ことに人が住む場においては。

木附の里は現代の日本では特別な存在かもしれない。しかしそれはいかにも懐かしく、あたりまえにたたずむ。特別に見えるプロセスも、わずかに視線を変えてみればあたりまえの道であるかもしれない。ここに学ぶことは多い。

(佐々木 葉)

